

中世ヨーロッパの伝説

—— (2) エッタの系譜 ——

高木昌史

序

『子供と家庭の童話集』Kinder- und Hausmärchen (以下、KHMとも略記)の「原註」Originalanmerkungenの中で、グリム兄弟は、中世ヨーロッパの神話や伝承世界を彩る白鳥乙女や竜退治といったモテイーフに関連して、しばしば古代北欧歌謡集『エッタ』Edda (九—十三世紀成立) (後述) に言及し、それと昔話 Märchen との内密な関係を指摘している。彼らは口承文芸研究の視点から、ゲルマン的な物語世界の祖型を古代北欧に探ったのである。KHM第二版増補改訂版が出版された二一九九年、『ゲッテ

インゲン学術報告』に発表された『エッタ』に関する書評において、兄ヤークォプは次のように述べている。「文書による証拠や暗示の他に、数千年以前の我々の種族の言語や歴史に対する無意識で予感的な感情が我々の胸の中に存在するとしたら、これらエッタ歌謡集を読む際に我々を襲いかつ魅了するものがまさしくそれに違いない⁽³⁾」。

一方、『エッタ』には、ドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』Das Nibelungenlied (一二〇〇年) に登場する人物やストーリーの原型とも言うべきものが含まれている (例えば、シグルズ—ジークフリート、グズルーン—クリエムヒルト、竜「大蛇」退治、等々)。「ニーベルンゲンの歌」の恐らく背景となっている民族大移動以来の古

代ゲルマンの神話や伝説、そして歴史が、『エッダ』には多数温存されているようだ。そして、それらは中世ヨーロッパの伝説世界を覗く際の貴重な宝庫となっている。⁽⁴⁾

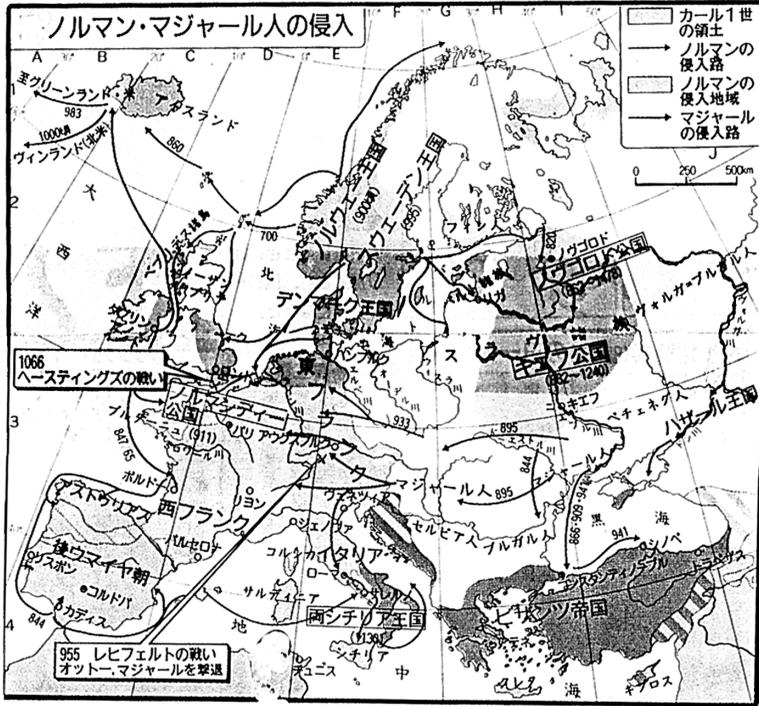
ドイツはもちろん、広くヨーロッパ全域、否、それどころか世界的な規模で、グリム兄弟は伝承文学を文献学的に研究していたのだが（KHM「研究ノート」等）、⁽⁵⁾特にゲルマン民族に共通の物語要素を採求する過程で、『エッダ』に着目したのは必然的な結果であった。ドイツと北欧は歴史的に深い絆で結ばれているからである。本稿では、以下、グリムの『子供と家庭の童話集』と『エッダ』との関わりを中心に、ゲルマン人の「無意識で予感的な感情」（J・グリム）の由来について考えてみたい。その際、具体例として、（1）白鳥乙女、（2）鴉の会話、（3）竜退治の三項目を取り上げることにする。

第一章 『エッダ』について

初めに、現在刊行中の『昔話百科事典』Enzyklopädie des Märchens（以下EMとも略記）等⁽⁶⁾を参考に、『エッダ』Eddaに関する基本的知識を整理しておきたい。⁽⁷⁾

「エッダ」という呼称が最初に現れたのは、中世アイスランドの詩人・歴史家・政治家であったスノリ・ストゥールソン Snorri Sturluson（一一七九—一二四一年）がスカルド詩人（九—十四世紀、北欧で活躍した宮廷詩人）のために著した手引書の写本と言われる。⁽⁸⁾ スノリは一二二〇年頃、「ギルヴィのたぶらかし」Gylfaginning [Gylfis Tauschung]、「詩の言語」Skaldskaparmál [Die Sprache der Dichtkunst]、および「詩句の種類一覽」Háttatal [Verzeichnis der Versarten]の三部から成るいわゆる『スノリのエッダ』（＝『散文のエッダ』、『新エッダ』）を完成する。中でも「ギルヴィたぶらかし」は古代北欧の異教的世界の神話を体系的に整理している点できわめて重要である。⁽⁹⁾

ところが、一六四三年、アイスランドの司教ブルユニヨールヴ・スヴェインソン Brynjólfur Sveinsson が神話詩を含む写本を発見、スノリの作品の根底となったにちがいない歌謡集をその中に見出す。彼は、スノリ同様、それを『エッダ』と名付け、口承の歌謡集とは見做さず、誤ってアイスランドの学者セームンド・シグフュンソン Saemundur Sigfusson（一〇五六—一一三三年）の作品であると推察した。（現在、「セームンドのエッダ」という呼称は使われ



図版1 ノルマン・マジヤール人の侵入

ない。ただし、グリムの時代にはこの呼称が使用されていた⁽¹⁰⁾。

ブリュニョールヴが発見した写本は、現在アイスランドの首都レイキャヴィクに「王の写本」Codex Regiusとして保管されているが、スノリの『エッタ』と区別して、『歌謡エッタ』(『詩のエッタ』、『古エッタ』)と呼ばれる。伝統的に、「神々の歌」と「英雄の歌」に分類される。

以上、『スノリのエッタ』は執筆年代が明らかだが、『歌謡エッタ』の成立に関しては事情が複雑のようだ。最古の写本は十三世紀中葉とされるものの、実際の成立年代に関しては、九世紀(五世紀に想定されるものもある)から十二世紀まで幅がある。多くは十世紀から十一世紀にかけて書かれたらしい。なお「エッタ」Eddaの語義については、古ノルド語の「祖母」あるいは「文芸」説、また地名説がある⁽¹¹⁾。

最後に、『エッタ』写本が存在するアイスランドという国について(図版1)。九世紀以前の状況は別にして、アイスランドへの集団的な



図版2 槍を持つオーディン、槌を持つトール、剣を持つフレイル
1100年頃 国立歴史博物館、ストックホルム

移住は、本格的には、西暦八七四年からノルウェーのヴァイキングによって開始された。当地には自由国家が創建され、九三〇年以降、立法・裁判府として民会 *Althing* が置かれ、執行権は族長たちのもとにあった。その後、西暦一〇〇〇年、民会はキリスト教を受け入れ、十一世紀末には、人口八万人を数えたが、一二六二年、内乱が誘因となって、アイスランドはノルウェー王家によって征服された。⁽¹²⁾ 『歌謡エツダ』が成立した直後のことである。

主に十世紀頃に成立した『歌謡エツダ』には、そういうわけで、大陸ヨーロッパの中世的・キリスト教的思考や慣習の影響は未だ少なく、異教的な風土が濃厚であった。大陸よりもむしろ、人里離れた島国アイスランドに、ゲルマン的なものの痕跡が数多く残存していたのである。十一世紀にキリスト教文化が侵入してくるまではそうであった。⁽¹³⁾

『歌謡エツダ』

前述のように、『歌謡エツダ』は「神々の歌」(図版2)と「英雄の歌」に分類されるが、ここで、レクラム(全訳)版「目次」⁽¹⁴⁾に拠って、二つの歌謡集から本稿に関係の深いものを紹介しておきたい。題名は邦訳「エツダ」(谷

口幸男訳)、A・クラウゼの独訳、古ノルド語原題(括弧内)の順である。

greotlenzka]。

「神々の歌」

レクラム(選集) 版編者H・クーンの「序文⁽¹⁵⁾」によると、「神々の歌」はドイツにもイギリスにも、またデンマーク

「巫女の予言」Die Weissagung der Seherin [Völuspá] / 「オーディンの箴言」Die Sprüche des Hohen [Hávamál] / 「グリームニルの歌」Das Grimnified [Grimnismál] / 「バルドルの夢」Balders Träume [Baldrs draumar]。

「英雄の歌」

「ヴェルンドの歌」Das Wölundlied[Völundarkvída] / 「フンディング殺しのホルギの歌」Das Erste Lied von Helgi dem Hundingsföter[Helgakvída Hundingsbana in fyrri] / 「レギンの歌」Das Reginnlied [Regnismál] / 「フ

北欧的ではあるが、根本的にはゲルマン民族に共通の要素を宿し、キリスト教以前の伝承が少ないドイツではとりわけ、この歌謡集は「計り知れない価値」を持っている⁽¹⁶⁾。

アーヴニルの歌」Das Fahrlied [Fährismál] / 「シグルドリーヴァの歌」Das Sigdrífalið [Sigdrífumál] / 「(古)シグルズの歌 断片」Fragment eines Sigurdlieðes [Brot af Sigurdarkvída] / 「グズルーンの歌」Das Erste Gedrúnnlied [Gudrúnarkvída in fyrsta] / 「ブリュンヒルドの冥府への旅」Brynhilds Helfahrt [Helreið Brynhildar] / 「(古)アトリの歌」Das (Alte) Atlied [Atlakvída in

他方、「英雄の歌」は、レクラム(選集) 版編者F・グ

レントツマーの指摘⁽¹⁷⁾によると、成立時期に従って、大きく三つのグループに分類される。第一は民族大移動に由来し、「ヴェルンドの歌」、「(古)アトリの歌」等がそれに数えられる。第二はヴァイキング時代のもので、「シグルズの歌

断片」、「レギンの歌」(竜の宝の歌) および「シグルドリーヴァの歌」(ヴァルキューレの眼覚め) がこれに属す。第三は十二世紀以降ドイツから北欧に伝播した題材で、

「ブリュンヒルドの冥府への旅」、「ファアーヴニルの歌」（鳥の予言）、「グズルーンの歌」がそうである。

注『グリム兄弟の蔵書』Die Bibliothek der Brüder Grimm の「エッタ」Eddaの項には、兄弟が収集・活用した貴重な文献が掲載されている。（本稿「結語」参照）

以上を確認し、『エッタ』と伝承文学の関連を、以下、具体的に見てゆくことにしたい。『エッタ』以外の文献として、本稿では、主に、グリム兄弟編KHMとその「原註」、同編『ドイツ伝説集』Deutsche Sagen（以下、DSとも略記）、およびヤーク・グリムの大著『ドイツ神話学』Deutsche Mythologie（DMと略記¹⁶）を参照する。

第二章 白鳥乙女 Schwanjungfrau

『歌謡エッタ』所収の「ヴェルンドの歌」は次のような内容である（以下粗筋¹⁹）。

スヴェイジオーズ「スウェーデン」にニーズズという

王がいた。彼には二人の息子と一人の娘があった。またフィン王にスラグヴィズ、エギル、ヴェルンド「ドイッ名ヴィーラント」という名の三人息子がいた。彼ら兄弟が狩りをしていると、池の辺で三人の女が亜麻を織っていた。側には白鳥の羽衣が置いてあった。彼女らはヴァルクューレで、二人はフレスヴェール「フランク王クロドヴィヒ」王の娘フラズグズ・スヴァンフヴァイトとヘルヴォル・アルヴィト、もう一人はヴァルランド「フランス」のキャール「皇帝」の娘エルルン「ドイッ名アララウン」であった。兄弟たちは彼女らを家に連れ帰った。エギルはエルルンを、スラグヴィズはスヴァンフヴァイトを、ヴェルンドはアルヴィトを妻にした。彼らは七年間暮らしたが、その後女たちは戦場へ飛び去って行った。エギルとスラグヴィズは妻を捜しに出かけたが、ヴェルンドは鍛冶をしながら美しい妻の帰りを待った。

さて、ニーズズ王は鍛冶の名人ヴェルンドを捕えて宝物を奪い、王妃の進言で、名人が逃げないように足の腱を切り、沖の島に幽閉し、宝を鍛えさせた。ニーズズの二人の息子が島に遊びに来た時、ヴェルンドは

その首を切り、頭蓋から酒杯を、眼から宝石を造って、それぞれニーズズと妃に送った。また娘が鳥に來た際に、彼女を麦酒で酔わせて孕ませた。こうして恨みを晴らした彼は王の家來に奪われた水かきを取り戻し、空中に飛び上がって、鳥を去った。ニーズズ王は絶望の淵に落ちた。

以上が「ヴェルンドの歌」である。前半は世界中で知られる羽衣伝説、後半は凄惨な復讐譚となっている。特に後半は多くのゲルマン民族の間に広まっている鍛冶屋ヴェーラント伝説の最も詳しい内容を提供している点でも注目されるが、ヴェルントが足の腱を切られる話は、一方で、ギリシア神話の鍛冶の神ヘパイストス（ローマ名ウルカヌス）を想起させる。彼の場合は、ゼウスの怒りを買ひ、天上から投げ落とされて足が不自由になったと言われる（異説もある）。またヴェルントが翼をつけて逃亡する話は、（同じくギリシア神話）ミノス王のもとから翼を造って脱出した工人ダイダロスを彷彿させる（彼の息子イカロスは太陽に近づき過ぎて翼の蠟が溶け墜落死した）。レクラム版『エッタ』の編者A・クラウゼが指摘するように、以上

の類似性に鑑みても、古典古代の題材やモチーフが、遙かな昔、民族大移動の時代、ヨーロッパの東側から西のゲルマン人の許にもたらされた可能性も考えられる。

他方、僧院長エウギップス Eugippus は彼の『聖セウエリヌス伝』（五一一年頃）の中で、今日の低部オーストリアの王妃ギゾーが二人のゲルマン人の金細工師を捕えて仕事をさせた話を伝えている。⁽²¹⁾ 細工師たちは王子を人質に脱出に成功したと言われる。『エッタ』の中の鍛冶屋ヴェルントの物語には、こうした様々な伝承が織り込まれているのかも知れない。いずれにせよ、物語は遅くとも九世紀には北欧で知られていたようで、F・グレンツマーもこれを『エッタ』最古の歌謡の一つに数えている。⁽²²⁾

さて、羽衣伝説は、周知のように、わが国でも有名であるが、中国は六朝時代（四世紀）の干宝「かんぼう」著『搜神記』には、驚くべきことに、次のような話が載っている（第三五四「鳥の女房」）（以下要約）。⁽²³⁾

新喻県（江西省）に住む男が、田に六、七人の娘を見る。みな毛の衣を着て鳥か人間か分からない。男は近づいて一人の娘の脱いでいた毛の衣を隠し、さらに

接近すると、鳥たちは飛び去ってゆく。残った一羽を捕えて、男は家に連れ帰り女房にし、三人の娘が生まれる。その後、女房は父親が隠した毛の衣の在り処を娘に尋ねさせ、それを見つけて飛び去る。時が経ち、母親は三人の娘を迎えに来る。そして皆は飛び去ってゆく。

池や田で水浴びをする乙女、岸边に脱ぎ置かれた鳥の羽、羽を隠すことによる妻の獲得、一定の期間連れ添ったあと、自分の羽を発見し飛び去ってゆく妻。古代中国の伝説と『エッダ』の物語は酷似し、いずれも「白鳥乙女」の基本構造を示している。ここで注目したいのは、「ヴェルンドの歌」の乙女たちがヴァルキューレであったことだ。

〔死者を〕選ぶ者「val-kyrja」を意味するヴァルキューレ Walkite は、オーデインに仕える武装した乙女たちで、戦場で倒れた勇士を天上のヴァルハラ宮殿に導いてゆく（「ギュルヴィたぶらかし」三六等）。エッダに登場するブリュンヒルドもその一人だが、彼女らは、換言すれば、異界の使者であり、人間の運命を決める（織る）者たちである。ヤーコブ・グリムは『ドイツ神話学』の中で、ヴァル

キューレに関して、「飛ぶ」才能と「泳ぐ」才能（白鳥）、そして「予言する」²⁶「亜麻を織る」（²⁷「運命の糸を織る」）役割に特に着目し、「白鳥乙女」の物語が当時も、北欧の民間伝承として生きていたことを語っている。

『昔話百科事典』にはさらに、興味深い研究が紹介されている。すなわち、「白鳥乙女」タイプの伝播領域は北部ユーラシアのシャーマニズムの地域と一致し、それとの関連を窺わせる、と。²⁸白鳥の羽をつけて天上の神々のところへ飛び去って行く乙女のイメージは、鳥の姿で異界を旅するシャーマンを想起させるのである。因みに、ルーミア出身の宗教学者ミルチア・エリアーデはその著『シャーマニズム』²⁹の中で、アルタイ、タタール、モンゴル、満州族のシャーマンが「鳥類の衣裳」を用いることに触れ、鳥の衣裳が「他界への飛翔」に不可欠であること、また古代ゲルマンの宗教・神話に、北アジア・シャーマニズムに「匹敵するもの」が見られることを指摘し、その例として、オーデイン Odinn³⁰を挙げた。北欧神話のこの主神は、ルー文字の秘密を知るために、風の吹く樹木「ユグドラシル」に「九夜の間」、己の身を捧げて、吊り下がったが（「オーデインの箴言」一三八—一三九）³¹、ここにエリアー

デは、シベリア・シャーマンにも似た一種の「イニシエーション儀礼」を認めるのである。「古代的イメージ」を示す『エッダ』のこの個所は、北ゲルマン人の異教世界を彷彿させると同時に、キリストの磔刑にも関連していると言われるが、「様々な文化の影響」が幾重にも層を成す歌謡として、『エッダ』は実に興味深い（レクラム版『神々の歌謡』「解説」）。

さて、昔話 Märchen にしばしば「異教的な信仰の痕跡」を探ったグリム兄弟は、KHM四九「六羽の白鳥」Die sechs Schwäne にも「異教的」なものを感知した。ドイツのカッセルで採集されたその昔話は次のような内容である。

昔、ある王様が森で狩りをして道に迷っていると、老婆「魔法使い」が近寄ってくる。彼女は自分の娘を王様の妃にすれば、道を教えてやると言う。王様は美しいが何かぞっとする娘と結婚する。彼は先妻との間に六人の息子と一人の娘がいたが、森の城に彼らを匿っていた。それを知った新妻は魔法のシャツを持って森に出かけ、息子たちにそれを投げかける。すると彼らは白鳥に変身し飛び去ってゆく。唯一人難を免れた

娘は王様にそれを報告する。そして娘は森の奥に兄弟を捜しに行き、丸木小屋を発見する。夕方、六羽の白鳥が飛んで来て床に下りると、白鳥の皮が取れ、兄たちがそこにいる。彼らは毎晩十五分だけ人間に戻るのだと言う。兄たちは妹に、六年間の沈黙と菊の花のシャツ制作が彼らを救う方法だと語る。その後、別の王様が狩りの途中で妹を見初め、彼女は王妃となり、三人の子供が生まれる。しかし兄たちとの沈黙の約束が原因で、姑に苛められ、あわや火炙りの刑になる寸前、六羽の白鳥が飛んでくる。妃がシャツを投げかけると、白鳥は兄たちに変身する。妃は王様に真実を打ち明ける。今度は姑が逆に火刑となり、王様と妃、そして彼女の兄弟たちはその後、幸せに暮らす⁽³⁵⁾。

「六羽の白鳥」(図版3)への「原註」の中で、グリムはこうコメントする。「この昔話は至る所で時代の相当な古さを示している。七枚の人間の〈シャツ〉は〈白鳥のシャツ〉と関連があるように思われる。これについては「ヴェルンドの歌」Völundarquidaが詳細に語るべき機会を与えてくれる」。



図版3 ヴァルハラに向かう白鳥の船
フェスターゲトランド、スウェーデン

兄たちを救うために、六年間、一心不乱に妹が編んだ「菊のシャツ」に、グリムは「白鳥乙女」のシャツ（＝羽）の痕跡を認めるのである。鍛冶屋ヴェルンドの妻となったアルヴィト Alwit は「異界の存在」⁽³⁷⁾を意味するが、彼女はヴァルキューレの一人で、地上と天上を連絡するオーディンの使者である。「六羽の白鳥」において、新妻に魔法のシャツを投げかけられた兄たちは白鳥に変身し飛び去ってゆく。それは、ある意味、異界への旅（＝死）を意味する。この死の魔法（＝白鳥への変身）を解くのは、妹の必死の願掛け作業（＝「菊のシャツ」に他ならない。そのシャツを投げかけられて、兄たちは白鳥から人間にふたたび変

身（＝蘇生）する。純真な兄弟愛が邪悪な魔法に打ち勝つのである。

『ドイツ俗信辞典』Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens（以下 H d A と略記）によると、白鳥には、その姿と色と動きの卓越した美しさゆえに、古来、超自然的な特性が認められてきた。ギリシア神話ではアポロンの、北欧神話ではニオルズの聖鳥として有名である。他方、この鳥には未来を予知する能力があるとされ、特に己の死が近づくと、それを予感して哀しく美しい最後の歌を歌う、という伝承（白鳥の歌）が古代から伝えられている。そして救われた魂は白鳥の姿となって飛び去るとも言われる。

K H M 四九「六羽の白鳥」にはこうした民間信仰が背景に息づいているようだ。魔法のシャツで白鳥に変身した兄たちは、いわば仮死状態で異界に隠れ、毎晩十五分だけ妹にその生存を告げ、彼女による救出の時を待っていたのであろう。ともあれ、この物語においては、地上と天上、実生活と異界、人間と白鳥といった二つの異次元の世界が時に交わり、時に乖離して、奥深い空間を織り成している。その背後には『エッダ』に具現化したゲルマン民族の「無意識で予感的な感情」（J・グリム）が潜伏しているのか

も知れない。

第三章 鴉の会話 Gespräch der Raben

ドイツ中央部のヘッセンで採集されたKHM六「忠臣ヨハネス」Der getreue Johannesは次のような物語である(以下粗筋)。

老王が臨終の床に忠臣ヨハネスを呼び、廊下の奥の部屋だけは王子に覗かせないように注意して息を引き取る。若い王は好奇心から部屋を開けさせ、黄金の屋根の国の王女の立像を見て恋焦がれる。ヨハネスは商人に変装し、王と共に船に乗り、王女の国に行き、彼女を船に乗せ国に帰る。途中、ヨハネスは三羽の鴉の会話から、王と王女を待ち受ける恐ろしい運命を知る。(二羽目) 王は王女と結婚は出来ない。二人が上陸すると、馬が来て、王がそれに跳び乗り何処かへ消えてしまうからだ。(二羽目) 助かる方法は？(一羽目) 別の男が馬に跳び乗り鞍の袋のピストルで馬を撃ち殺せばよい。(二羽目) それだけでは駄目だ。花婿の新

品の下着は硫黄とピッチが織り込まれ王は骨まで焼かれてしまうからだ。(三羽目) 助かる方法は？(二羽目) 誰かが手袋でその下着を火で燃やせばよい。(三羽目) 下着を燃やしても無駄だ。婚礼のあと舞踏会で妃が踊り始めると、彼女は倒れてしまうからだ。誰かが妃の右の乳房から血を三滴吸い出せばよい。

最後の予言を阻止したヨハネスは王の誤解を招き、死刑を宣告される。執行直前、彼は鴉の予言を王に打ち明けて石と化す。王女と結婚した王は双子を儲けるが、ヨハネスを生き返らせない。石像のヨハネスが口をきく。王が双子を犠牲に捧げれば自分は生き返ると。苦悩の末、王は双子を犠牲にしヨハネスを蘇生させる。すると首を切られた双子も元どおり生き返る。

鳥言葉を理解できたヨハネスが、船上で聞いた鴉Rabeの会話を契機に、ストーリーは急展開する。昔話「忠臣ヨハネス」において、この会話部分は物語全体に活気あるリズムを与えている。予知能力がこの鳥類に具わっているという観念、すなわち民間信仰が、この昔話の前提となっている。グリム童話からも一例挙げてみたい。

KHM 一〇七 a 「鴉」Die Krähen⁽⁴⁰⁾は、バルト海沿岸のメクレンブルクで採集された昔話である。(注 KHM 初版から第四版まで所収、第五版以後 KHM 一〇七「二人の旅職人」Die beiden Wanderer と差し替えられた。) (以下粗筋)

あるところに、正直な兵隊がいた。働き者でお金を蓄えていた。それに眼をつけた悪い兵隊仲間が彼に近づき、故郷で金儲けをしようと言って、町の外に誘い出した。しばらく行くと、二人は言いがかりをつけ、正直な兵隊から金を奪い取り、さらに両眼をくり抜いて絞首台の柱に縛り付け、町へ引き返した。盲目となった兵隊は神様に祈った。夜更けに三羽の鴉 Krähne がやって来て会話する。

(一羽目) 自分たちが知っていることを人間が知らないのは可哀そうだ。王様は姫の病気を治してくれた者には姫を嫁にやると約束しているが、誰もそれが出来ない。池の蛙を黒焼きにしてその灰を吞ませればよいのに。(二羽目) その通り。今夜、天から不思議な葉の露が降る。盲人がそれを眼につけると治るのだ

が。(三羽目) そうだ。町の井戸は涸れてしまったが、市場の石の下を掘れば水が出る。

こう語って三羽の鴉は飛び去る。兵隊は縛られた紐を解き、草を数枚採って、その上の露を眼に当てると、ふたたび見えるようになる。その後、池で蛙を捕えて灰を取り宮殿へ向かい、姫に灰を吞ませて回復させ、市場の石の下に井戸を掘り当て、姫と結婚する。悪い兵隊たちは自分たちも絞首台へ行けば、何か良いことが聞けると思いい出かけるが、鴉たちに眼を突き出され顔を突かれて死ぬ。王女を嫁にした兵隊は二人の骸骨を見つげ墓に葬ってやる。

右の物語においても、鴉の会話が兵隊たちの運命を急転させる契機となっている。鳥たちには人間には分からない未来が見えているのである。ここでも、「忠臣ヨハネス」と同様、鴉の会話がストーリー全体にリズム感と奥行きを与えているのが印象的である。

グリム兄弟は、〈鴉〉が登場するこれらの昔話に関して、次のようにコメントしている。まず KHM 六「忠臣ヨハネス」「原註」では、「運命の鳥」Schicksalsvogel としての

「鴉」die Rabenに言及し⁽⁴¹⁾、またKHM一〇七a「鴉」「原註」においてはこう記す。「ここで何をすべきかを盲人に

語る鴉たちは、シグルズSigurdに良い忠告を与える鳥たちに似ている（「ファーヴニルの歌」Faminnal参照⁽⁴²⁾）。

グリム自身が括弧内に出典を明示している『歌謡エツダ』「ファーヴニルの歌⁽⁴³⁾」を覗いてみたい。主人公シグルズ（ジークフリート）は養父で鍛冶屋のレギンに唆されて、大蛇ファーヴニル（レギンの兄）を剣で殺し、その心臓を切り取り炙っている。その時、火傷して指を口にした途端、彼は鳥の言葉が分かるようになる。そして數で囀る四十雀「しじゅうから」たちの会話から重要な情報を手に入れる⁽⁴⁴⁾。一部引用してみる。

「あそこにレギンは横になって思索しているよ。信じ切っている若者を畏にかけようと思って。あの禍いの鍛冶屋は怒って、いつわりのことばをよせ集め、兄の復讐を遂げるつもりなのだよ」

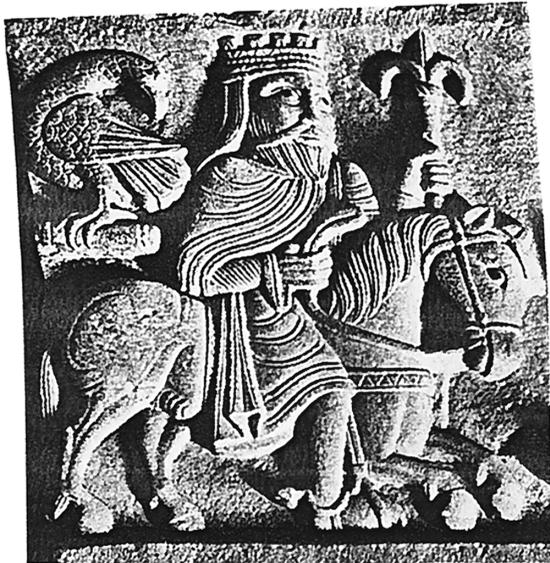
「あの老いばれ賢者の首を刎ねて冥府へやってしまったらいいのにな。そうしたら、ファーヴニルの守っている莫大な黄金は全部独り占めすることができるの

に」

（谷口幸男訳⁽⁴⁵⁾）

七羽の四十雀たちはこうして次々に会話を交わす。右の文章は、周知のように、ドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の遙かな背景ともなっている物語のコンテクトに属している。大蛇＝竜ファーヴニルの焼き汁を口にしたシグルズは、一瞬で、鳥の言葉を理解する能力を身につける。四十雀Meieが「ここで会話をするのだが、先に見たグリム童話「忠臣ヨハネス」と「鴉」Rabe/Kraheが人間の運命を予知する（「大型の鳥」Rabeと「中型の鴉」Kraheは物語の中ではしばしば区別されない⁽⁴⁶⁾）。実は、この鴉も『エツダ』に縁の深い鳥である。

鴉は、古来、その黒い色や腐肉を食する習性もあって、一般に、その不気味さが忌み嫌われる傾向がある反面、賢さがしばしば尊ばれる鳥でもあった⁽⁴⁷⁾。ギリシア神話では、鴉はアポロンの聖鳥であり、北欧神話ではオーディンのやはり聖鳥であった⁽⁴⁸⁾。『歌謡エツダ』「グリーンムニルの歌」（二〇）を引用しながら、『スノリのエツダ』「ギユルヴィたぶらかし」は鴉について次のように語る（図版4）。



図版4 オーディンの印、鴉とイルミン柱を持つ王
大聖堂支柱浮彫、チューリヒ

「二羽の鴉が彼「オーディン」の肩にとまり、見たり聞いたりしたことすべてを彼の耳に告げる。鴉の名はフギンとムニンである。夜が明けると、オーディンは、世界中を飛び回るように、彼らを送り出す。すると朝食時に彼らは帰って来る。オーディンは彼らから

様々な情報を聞く。そのため人はオーディンを鴉神と呼ぶ。次のように言われている通りに。
 〈フギンとムニンは 毎日、雄大な地上を
 飛び渡る 私はフギンが心配だ
 戻って来ないのではないかと しかし私はさらにムニ
 ンを気遣う〉⁴⁹⁾

鴉フギン Huginn は古ノルド語 hugi = Gedanke 「思考」に、ムニン Munin は古ノルド語 munna = sich erinnern 「記憶する」に由来する。オーディンはまさしく「思考」と「記憶」という強力なお供を従えた北歐神話の主神なのである。この主神は一方で、「軍勢の父」として、ゲリ Geri とフレキ Freki (貪欲)の意) という二匹の狼に餌を与え己の従者としている(「グリームニルの歌」一九)。ヤークブ・グリムは『ドイツ神話学』の中でこう解説する。「野鳥の頂点には鷲が王者として君臨する。ゼウスの使者である。我々の動物寓話においては、鴉が狼と狐両方の役割を引き受けているように思われる。鴉は前者「狼」の貪欲さと後者「狐」の賢さを有しているのだ。二匹の狼と同様、二羽の鴉、〈フギン〉と〈ムニン〉は、オーディンに

絶えず付き従っている。彼らの名前は思考力と記憶を表している。彼らはあらゆる出来事に関する情報を彼の許に運んでくる」(第二十一章⁽⁵¹⁾)。

ヤコブは鴉という鳥類に「食欲」と「賢さ」両方の性格を認めているのである。そして右の一節に関連して、興味深い注釈を加える。「スロヴェニアのある昔話においては、誰もが一羽の鴉を飼っている。その鴉は物知りで、家に帰って来る時には、飼い主にあらゆることを物語ってくれる⁽⁵²⁾」。ヤコブはさらに、「人間の運命について語り合い、また予言する」鳥として鴉を挙げ、KHM一〇七の中で、鴉が盲人に眼の入手方法を教えてくれる場面を紹介する⁽⁵³⁾。

以上見られるように、鴉は北欧神話やドイツの昔話の中で、様々な情報をもたらす貴重な鳥として活躍する。そしてわが国においてもこの事情は変わらない。柳田國男著『日本の昔話』から一例を引いてみたい。陸中「岩手県」上閉伊郡の有名な「聴耳頭巾」は次のような話である(以下要約、へく部分は引用)。

昔、奥州の在所に一人の貧しい爺がいた。氏神の稲荷様にお供えも出来ずにいると、氏神は運を授けよう

と、爺に被ると鳥や獣の言葉が分かる宝頭巾をくれる。爺が街道の樹の下で休んでいると、浜と国中から一羽ずつ鳥「からす」が飛んで来て、その木の枝にとまる。爺は早速、聴き耳頭巾を試す。鳥たちの会話が聞こえる。浜の鳥が語る。浜の村の長者が五、六年前に土蔵を建てた時、屋根の板の下に一匹の蛇が釘で打ち付けられて半死半生になった。雌の蛇が食べ物を運んで生きているが、その時から、長者の娘が長患いしている。(人間という者はなさない者で、少しもそれを覚らない)。国中の鳥もその通りだと言って二羽は飛び去る。爺は八卦に扮して長者の家に出かけ、鳥から聴いた通りに、蛇を助け出す。長者の娘は回復し、爺はお礼に三百両もらって金持ちになる。氏神様のお宮を建て直しお供えし、また旅に出る。大木の下で休んでいると、西と東から鳥が飛んで来て、世間話を始める。「以下、同様にして爺は聴き耳頭巾を用いて、長者の病気を治しお礼をもらう⁽⁵⁴⁾」。

グリム童話「忠臣ヨハネス」と「鴉」の場合と同じく、日本のこの昔話においても、鴉が人間の運命を予知してい

る。しかも、(人間と言う者はなさない者で、少しもそれを覚らない)と、人知の限界を鴉が歎いている。KHM 一〇七aの中で、鴉たちが人間の無知を憐れんでいたのが思い出される。人間は自然の奥義を知らない。それだけに、鳥の言葉が分かる、というモテーフは昔から人々を魅了して止まなかったであろう。

このモテーフは、グリム童話「三つの言葉」Die drei Sprachen (KHM三三)にも典型的に現れている。詳細は措くが、スイス南部のオーバーヴァリスの昔話で、グリムは「原註」の中で、この物語の主人公のモデルとして、中世のローマ教皇の名を挙げている(シルヴェストル二世、インノケンティウス三世)⁽⁵⁶⁾。時代的には、『エッタ』成立の頃である。

日本でも柳田國男がこのモテーフに強い関心を抱き、KHM三三の内容を紹介しながら、昔話の東西比較研究「鳥言葉の昔話」(『昔話と文学』所収)を発表している⁽⁵⁷⁾。ドイツのサンスクリット学者T・ベンファイ、イギリスの民族学者J・フレイザー、フィンランドの口承文芸学者A・アールネの業績を踏まえたスケールの大きい、そして緻密な名論文である⁽⁵⁸⁾。

以上、多くの関心と呼んだ「鳥言葉」の中でもとりわけ、鴉は様々な民族においてそれぞれ重要な役割を果たしてきた。現代においても、鴉は人間社会に身近な鳥類である。遙かな神話の古層に潜む鴉ともども、この鳥類に対する我々の興味は尽きることがない。

第四章 竜退治 Drachenkampf

『歌謡エッタ』「ファーヴニルの歌」については、(鳥言葉)との関連ですでに触れたが、そもそもこの歌は世界各地に見られる竜「ドラゴン」退治モテーフの北欧タイプとして有名である。内容はほぼ次のようである(以下要約)。

若武者シグルズは、養父レギン(鍛冶屋)にけしけられて、大蛇(＝竜)のファーヴニルを殺すべく、その水呑み場へ向かい、途中に穴を掘る。黄金を守る竜がそこに這い進んできた時、彼はその心臓を剣で刺し貫く。瀕死のファーヴニルは、裏切り者のレギン(ファーヴニルの弟)はシグルズをも裏切るだろうと



図版5 ジークフリートと竜の戦い
ヒーレシュタット丸太組み教会西正面入口厚板

告げて死ぬ。隠れていたレギンが現れ、竜の心臓を切り取って自分に食べさせてくれと言う。心臓が炙り上がったかどうか試した際、シグルズは指を火傷し、それを口に入れた途端、鳥の言葉が分かるようになる。彼は四十雀「しじゅうから」の会話を耳にする。鳥たちの話からシグルズは、レギンが彼を殺してファーフニルの莫大な黄金を一人占めしようとしていることを知る。そこで若武者はレギンの首を刎ね、ファーフニルの心臓を食べ、さらに四十雀の言葉から、火に取り巻かれた山の上の館に、一人の絶世の美女、戦いの乙女シグルドリーヴァ「ヴァルキューレ」が眠っていることを教えられる。シグルズはファーフニルの棲家に行き、黄金と宝物を見つけ、愛馬グラニの背にそれらを積む⁵⁹。

以上「ファーフニルの歌」のドラゴン退治(図版5)は、竜が秘蔵する黄金の獲得と結びついた物語となっている。因みに、シグルズIIジークフリート(IIジークフリート)の武勇を歌うドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』Das Nibelungenlied(一二〇〇年頃)の竜退治の箇所を覗

いてみたい。

Noch weiz ich an im märe, daz mir ist bekant.

einen lintrachen den sluooc des heldes hant.

er badet sich in dem bluote : sin hit wart hurmin.

des snidet in kein wäfen ; daz ist dicke worden sein.

そのほかにも私はあの男についていろいろ知っております。

あの勇士はある時竜をも退治しました。彼はその血を全身に浴びて、

そのため肌が不死身の甲羅と化したのです。

どんな武器も彼を傷つけ得ないことが度々証明されました。

第三歌章（一〇〇—一〇三行）（相良守峯⁽⁶⁰⁾訳）

右の一節は、ブルゴントの国に美しい姫がいるという噂を聞いてウォルムスの都に乗り込んで来たニーデルラントの英雄ジーフリトに関して、グンテル王の家来、豪傑のトロゲネのハゲネが語る場面である。ニーベルンゲンの宝を

手に入れ、小人アルブリーヒから隠れ蓑を奪い取った異国の英雄は、竜退治も成し遂げました、とハゲネは王に告げる。

『歌謡エッタ』「ファーヴニルの歌」では、竜退治と宝物の獲得はセットになっていたが、ここでは、竜の血を浴びた英雄の肌が不死身の甲羅＝角質となったことが語られている。英雄（シグルズ、ジーフリト）のドラゴン退治は、伝承によって重点が異なるのである。『ニーベルンゲンの歌』では、竜の「血」bluot (Blut) が「角質」hurmin (Hornhaut) の原因となったことが角質とならなかった（＝弱点となった）背中の中心ともどもその後の物語の展開に大きな意味を持つてくる。それは中世末期の民衆本『不死身のジークフリート』の題名ともなつてゆくのだが、ここで詳しくそれに触れる前に、「竜」について一言しておくたい。

『ニーベルンゲンの歌』の右の一節で用いられた「竜」の原語は lintrache である。⁽⁶¹⁾これは lint = Schlange 「蛇」と trache = Drache 「竜」(Lexer)⁽⁶²⁾の複合語で、半は「蛇」半は「竜」の空想上の動物であるが、この「竜」Drache についてヤーコプ・グリムは『ドイツ神話学』の中で次のよ

うに説明している。「蛇は大地を這い、そこにどくろを巻くが、自由に翼が使えると、それは竜 drache と呼ばれる。これはドイツ語ではなく、ラテン語の draco、ギリシア語の drakon に由来し、すでに初期から導入された言葉である。古高ドイツ語 tracho、アングロ・サクソン語 draca、古ノルド語 dreki、セームンドのエッタ『歌謡エッタ』は一度だけ dreki を用い、それ以外は、ormr、アングロ・サクソン語の vurm、古高ドイツ語の wurm、ゴート語 vaurms であるが、これはより一般的に、蛇の概念を含んでくる」。

以上から、新高ドイツの「竜」には Drache あるいは Lindwurm (怪物の大蛇) という語が用いられる。グリム兄弟編『ドイツ伝説集』二一六番「竜のお出まし」Der Drache fährt aus と二一九番「竜洞」Das Drachenloch には Drache が、また二一七番「ヴェインケルリートと毒竜」Winkelried und der Lindwurm と二一八番「泉に住む毒竜」Der Lindwurm am Brunnen には Lindwurm の語が使用されている。古ノルド語 ormr は「蛇」Schlange を意味し、新高ドイツ語の Wurm は(足や羽のない)「虫」の他、前記 Lindwurm にも用いられる。ヤーコフが記述しているように、「翼」

Fügel「ヤーコフの表記」(= Flügel) がある否かが、要するに、これら二語の分かれ目のようである。

ところで、ヤーコフは右の記述のあと、「竜」Drache に関して、次のように語る。「さて、英雄の仕事は、巨人同様、ある程度それと同一視されてもいる竜 drachen を世界から根絶することであった。トール自身、巨大なミズガルズと戦った。そしてジークムント、ジークフリート、ベーオウルフは、この上なく勇敢なドラゴン征服者として立っている」。

北欧神話のトール Thor はアース神族最強の神で、ゲルマン神話のドナー Donar に相当し、世界を取り巻く大洋に棲む大蛇〈ミズガルズ〉midgardsorm を打ち倒すが、自らも、大蛇の毒によって命を落とす。ジークムント Siegmund (Sigmund) は『ニーベルンゲンの歌』に登場するニーダーラントの王で、ジークフリート Siegfried (Sigurd) の父である。彼は、スウェーデン南部を舞台にした古英語の叙事詩『ベーオウルフ』Beowulf の中では、巨人や竜を退治した英雄の姿で登場する。そしてベーオウルフ Beowulf (= Beowulf) は、同名の叙事詩の主人公で、宝を守る竜を退治する(第三十一節以下)。⁽⁶⁷⁾『歌謡エッタ』

「ファールヴニルの歌」でもそうであったように、宝と竜退治のモテイーフはセットになっているが、中世ドイツの伝承には、宝のモテイーフとは別に、竜退治と関連して、もう一つ重要なテーマが存在する。すなわち、乙女（姫）の救出である。

前述の民衆本『不死身のジークフリート』Historie von dem gehörnten Sieghried⁶⁹は、一七〇〇年頃に初めて印刷されたもので、英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』とは、ある意味、対照的な作品である。『ニーベルンゲンの歌』では、先の引用で見たように、竜との戦闘場面がほんの四行でエピソード風に扱われるに過ぎないが、『不死身のジークフリート』はむしろそれを主題とする。若き主人公ジークフリートは森で竜を退治し、その血を浴びて「不死身」⁷⁰＝「角質」gehörtと⁷¹なる。そしてさらに他の竜と戦う。彼は騎士として生きてゆくためにライン河畔のヴォルムスへ赴く。ギバルドゥス王に歓迎されるが、ある日、王の美しい姫が飛んできた竜に襲われ、山の彼方の巢岩に攫われる。以下、物語はジークフリートによる姫の救出を中心に繰り返り広げられる。

竜からの姫の救出、ドラマティックなこのストーリーは、『歌謡エッダ』にも『ニーベルンゲンの歌』にもなかったジークフリート伝説の今一つの局面を示しているが、竜に纏わる物語としては、実は、むしろ伝統的なものに属している。ギリシア神話、あるいは聖者伝にその祖型は見出されるのである。

ギリシア神話の英雄ペルセウスはエティオピアに来て、ケーペウス王の娘アンドロメダが海の怪物（絵画ではドラゴンの姿）⁷⁰の生贄として岩に縛られているのを見発する。彼女の母が、海のニンフよりも己の方が美しいと誇って海神の怒りを買ひ、国に災難が起こったため、アンモン神の神託によって、娘のアンドロメダが怪物の生贄に供されたのである。姫の美しさに惹かれたペルセウスは、彼女との結婚を条件に、怪物を退治し、アンドロメダを解放する（アポロドーロス『ギリシア神話』第二巻／オウイデイウス『転身物語』第四卷）⁷¹。

中世の聖者伝においても竜退治の物語はよく知られている。ヤコブス・デ・ウォラギネ Jacobus de Voragine（一二三〇頃—一二九八年）の『黄金伝説』Legenda aurea（「聖ゲオルギウス」伝の内容はこうである（図版7））。



図版6 ウテヴァール「ペルセウスとアンドロメダ」
1611年



図版7 ティントレット「竜を退治する聖ゲオルギウス」
1550年代後半

カッパドキア出身の騎士ゲオルギウスがリビュアの町を訪れたとき、住民たちが近くの湖に棲む毒竜に悩まされているのを知る。人々は籤引きで、毎日人間一人と羊一頭を人身御供に捧げたが、遂に王の一人娘の番になる。一週間の猶予のあと、王女は竜の棲む湖に向かう。偶然そこにゲオルギウスが馬で通りかかり、王女から事情を聴く。そこに竜が現れ、騎士は十字を切つて長槍で怪物を倒す。人々に洗礼を受けさせたあと、彼は剣で竜を殺し、お札に差し出された財宝を貧者に分配し町を立ち去る。⁽⁷³⁾

竜退治のテーマは昔話でも好まれる。グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』六〇番「二人兄弟」Die zwei Brüder や一二九番「腕利き四人兄弟」Die vier kunstreichen Brüder がその例だが、前者を覗いてみたい。「二人兄弟」の粗筋については、本稿(1)「カロリング朝」すでに紹介したので(本誌第二一六号)、ここでは竜退治の部分を見ることにする(以下粗筋)。

狩人の許で育つた二人兄弟は、森を出て別れ、弟は都へ向かう。喪中の布がかかっている。宿の主人に聞くとき、王様の一人娘が死ぬ運命にあると言う。都の外

の高山に棲む竜が毎年、処女を犠牲に要求し、今回は姫が人身御供になるのだ、と。翌朝、弟は仲間の動物を連れて山に行く。教会があり、祭壇に杯が三つ置いてある。それを飲み干した者は地上最強となり、入口の闕の前に埋められた剣を用いることが出来る、と書かれている。

姫が人身御供となる時刻が近づき、弟は姫を教会に匿う。そこに頭が七つある竜が現れる。火炎を吐きながら襲ってくる竜の頭を、弟は三つずつ切り落とす。さらに跳びかかって来る竜の尻尾を切つて弟は力尽きるが、動物たちが代わりにドラゴンを引き裂く。弟は七つの頭から舌を切り取り、証拠として王の許に持参する。⁽⁷⁴⁾

KHM六〇への「原註」の中で、グリムはこう記す。「それから〈竜からの乙女の解放〉die Betreibung der Jungfrau vom Drachenが続く。すなわち、ドイツの歌謡ではクリエムヒルトのそれだが、北欧のものでは炎の壁を跳び越える話になっている。こうして彼は彼女を手に入れる。しかし彼はふたたび彼女から別れる、ちょうどシグルズが

ブリュンヒルドから別れたように」() は原文イタリク(75)ク体)。

「竜からの乙女の解放」とグリムが記しているのは、前記民衆本ではなく、韻文による『不死身「角質」のザイフリートの歌』Das Lied von himen Seyfried (十六世紀)を指すのだろうか。グリムはそれを『歌謡エッタ』におけるシグルズとブリュンヒルドの出会いの場面に重ねる。英雄は炎の垣根を超えて美女の許へ辿りつく。炎は竜に譬えられている(「シグルドリーヴァの歌」、「ブリュンヒルドの冥府への旅」)。ともあれ、竜退治のテーマが乙女(姫)の救出と結び付くことによって、ジークフリート伝説はギリシア神話や中世の聖者伝の系譜に連なると同時に、昔話「メルヘン」というジャンルとも内密に結び付くのである。竜退治に関連して、最後に、ヴィルヘルム・グリムの興味深い見解を紹介したい。

代表論文の一つ『古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について』Über die Entstehung der altdutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen(76)の中で、ヴィルヘルムは言う。北欧文学とドイツ文学の関係を探るためには、最初期の時代に遡る必要がある。歴史からも裏付け

られるように、「北欧の住民はゲルマン人と同じ起源をもつ」からだ、として彼は続ける。「アジアから発し、ロシアとプロイセンを通り、バルト海沿岸に達し、それからユトランド(ユラン)とシエランを通じて、その民族は北方の国、小人たちがとほうもない宝を山の中で守り、龍が黄金の上に横たわって、それを保護している国へとやってきた。神話に深く根付いていて、多様な形態をとる、北欧の富についてのこの信仰が、ふたたび現れることを考えると、富の神が住んでいる、ふしぎな山メルについてのインド人の伝説が、スカンジナビアへ行き先をむけた、とシユレーゲルが報告しているのも、ありえないことではない」(谷口幸男訳)。(77)

ヴィルヘルムがこの論文を発表したのは一八〇八年だが、それは右の文章の中で言及されている(フリードリヒ・シユレーゲルの記念碑的なサンスクリット学集成『インド人の言語と知恵について』Über die Sprache und Weisheit der Indier 刊行の年でもあった。十八世紀末、イギリスのウィリアム・ジョーンズが古代インドのサンスクリット語の重要性を発見して以来、西欧ではインド・ヨーロッパ語族の比較研究が本格的に開始され、ヤーコプ・グリムも言

語学者としてそれに大きく寄与することになるが、彼の弟
ヴィルヘルムもやはり、当時の学問動向を見据えながら、
口承文芸学の視点から、テオドーア・ベンファイと同様⁽⁸²⁾、
昔話の〈移動理論〉 Wanderungstheorie の可能性に想いを
馳せていたのである。しかも竜伝説をめぐる右の文章は、
ギリシア神話（ペルセウスとアンドロメダ）や聖ゲオルギ
ウス伝、また『歌謡エツダ』や『不死身のジークフリート』
物語を読み比べてきた今、いよいよその信憑性を増し
てくるように思われる。

結語

『子供と家庭の童話集』『原註』を見ると、グリム兄弟が
いかに深く『エツダ』に取り組んでいたかが分かる。実は、
彼らはこの古代北欧歌謡の重要性に気づき、彼ら自身、解
説付き写本テキストの編集を進めていた（一八一五年）。
しかし北欧（デンマーク／スウェーデン）で「完全な版」
が発表されたため刊行を断念したのである。『グリム兄弟
の蔵書』Die Bibliothek der Brüder Grimm には『エツダ』
Edda 'セームンドのエッタ' Saemundar-Edda (= 歌

謡エツダ』、『スノリのエツダ』 Snorra-Edda の三つに分
類された膨大な文献が掲載されている⁽⁸⁴⁾。例えば、『歌謡エ
ツダ』の項には、ヤーコプ・グリムが詳しい書評を発表し
た『セームンドのエッタ』 Edda Saemundar (アイスラン
ド語—ラテン語対訳版、一七八七—一八二八年) の他、ド
イツ語版、デンマーク語版、スウェーデン語版、等々、各
国の文献が出揃っている。それらを参照しながら、グリム
兄弟は古代北欧の神話・伝承を研究していたのである。

ところで、グリム以前に『エツダ』の魅力に惹かれた人
物がいる。文芸批評家 J・G・ヘルダー Herder (一七四
四—一八〇三年) である。彼は当時一世を風靡した論集
『ドイツの様式と芸術』 Von deutscher Art und Kunst (一
七七三年刊)⁽⁸⁶⁾ 所収のエッセイ「オシアンおよび古代諸民族
の歌謡に関する往復書簡からの抜粋」 Auszug aus einem
Briefwechsel über Oskian und die Lieder alter Völker の中
で、古代ケルトのオシアンと並んで、『エツダ』から数篇
を挙げ、その「ドラマ性」 das Dramatische を称揚しなが
らこう語る。「オーデインの冥府行、ヴァルキューレの糸
紡ぎの歌、呪文の歌としてオシアンには、何と言おうストー
リー die Handlung がある」とだろー⁽⁸⁸⁾」。さらにヘルダー

は、この古代歌謡における「北歐的な魔術の音調」der Nordische Zauberton に注目し、その例として「オーディンの冥府行」Odins Höllenfahrt (=「バルドルの夢」二一—四)を引証する⁽⁸⁸⁾。そして五年後、ヘルダーは『歌謡における諸民族の声』Stimmen der Völker in Liedern 第二部(一七七八/七九年刊)⁽⁹⁰⁾を発表、その中で北欧の「女予言者」Sibylleとしての「巫女の予言」Välsupa や歌謡の「魔力」Zauberkräftを響かせる「オーディンの箴言」を紹介する⁽⁹¹⁾。近代文芸批評の旗手ヘルダーはこうして『エッダ』に、「ドラマ」と「ストーリー」を認め、北方的な「音調」とその「魔力」を感じたのだった。因みに、ヘルダーから多くを学んだ文豪ゲーテも、後年、『エッダ』「オーディンの箴言」Havamal から有名な「ルーネの章」Runa Capitule を独訳している(一八〇二年)⁽⁹²⁾。ゲーテ自身、魔術的なものへの関心が強かったことを考えると(『ファウスト』他)、興味深いものがある⁽⁹³⁾。

ヘルダーとゲーテに続いて、グリム兄弟が本格的・文献学的に『エッダ』研究に携わることになるのだが、成果の一端は、前述のように、KHM「原註」に記録された。本稿では、その中から「白鳥乙女」、「鴉の会話」、「竜退治」

を採り上げた。『エッダ』はこれらいずれにおいても、モティーフやテーマの深層解明に不可欠の作品であった。

ヘルダーは以上見るように、『エッダ』に「ドラマ」や「魔術」を読み取ったが、約百年後、リヒャルト・ヴァグナー Richard Wagner も楽劇『ニーベルングの指環』Der Ring des Nibelungen (一八五四—七四年)⁽⁹⁴⁾創作に際して、『エッダ』の「ドラマ」性に着目したようだ。この四部作(序十三部)を仕上げるために、彼は『ニーベルングの歌』を四種類、また『エッダ』も二種類、版を準備し、他に『ヴォルスunga・サガ』とヤークوپ・グリムの『ドイツ神話学』を頻繁に参照した⁽⁹⁵⁾。『エッダ』では、中でも「レギンの歌」Reginsmal (『歌謡エッダ』)と「ギュヴィたぶらかし」Gylfaginning (『スノリのエッダ』)が『ラインの黄金』に重要な典拠を提供したとされるが、例えば、『フアーヴニルの歌』および「シグルドリヴァの歌」とともに(若きシグルズの歌)シリーズを構成する「レギンの歌」では、小人、魔術、神々、変身といった異教的な情景の中、活気ある会話が登場人物たちの間で交わされる。物語自体にドラマ性が内在するばかりではなく、歌謡の作品

構造、特に語りと台詞の対比、「会話」の効果的使用が、音楽家に多くの示唆を与えたのではあるまいか。いずれにせよ、ヴァグナーにとって『エッダ』は彼の畢生の大作を完成する上に必須の作品であった。

さて、『エッダ』の文献学的研究に没頭したヤーコブ・グリムは、例の「書評」の中で、この古代歌謡に「我々の胸の中の一つの無意識的で予感的な感情」を抱いた。ゲルマン的なものの故郷を彼はそこに感じ取ったのである。また彼の弟ヴィルヘルムもその代表論文において、アジア（特にインド）から北欧に至る雄大な民族移動の歴史を背景に、ドラゴン伝説をめぐる古代的な息吹に注目した。

本稿では、白鳥、鴉、竜という太古の昔から人間世界に何らかのかたちで深く関わってきた存在を考察した。これらの現実的あるいは空想的生物は、地域や時代を超えて、絶えず人間の想像力を刺激する何かを多分に持っている。伝承文学はその何かを探る上に貴重な資料となるのだが、それは、換言すると、このジャンルがその奥底にユングのいわゆる〈集合的無意識〉あるいは〈元型的イメージ〉を内包しているからにちがいない。ヤーコブは明らかにそれを感じ取っていたのである。

『エッダ』には、本稿で扱った三つのテーマ以外にも、例えば、小人、ミーミルの首、あるいは冥界（ヘル）等、現実と神祕が入り混じる興味深い世界が数々埋もれている。神話、伝説、昔話が共鳴し合う古代歌謡集『エッダ』は、北欧の一隅ばかりではなく、広くヨーロッパ全体の文化研究にとって看過できない作品なのである。

注 事典・辞典類、昔話研究とグリム関係の文献は、略号を含めて、(1) カロリング朝末尾、『エッダ』他は本稿末尾の「主要参考文献」を参照されたい。

註

- (1) KHM/Reclam, KHM/BDK.
- (2) J. Grimm: Edda Saemundar hinns fróðain; J. Grimm/KS, Bd.4, S.116-122.
- (3) aa.O., S.117.
- (4) Heldenlieder der Älteren Edda. Auswahl (Reclam), Einleitung, S.3-5.
- (5) KHM/Reclam.
- (6) EM, Bd.3, 1981/Die Götterlieder der Älteren Edda (Reclam)/Die Iam)/Die Heldenlieder Der Älteren Edda (Reclam)/Die Edda des Snorri Sturluson (Reclam).

- (7) EM, Bd.3, S.979-1003.
- (8) EM, Bd.3, S.979.
- (9) EM, Bd.3, S.982.
- (10) 註(2)
- (11) EM, Bd.3, S.979-980.
- (12) dtv-Atlas zur Weltgeschichte, Deutscher Taschenbuch Verlag, München, Bd.1, 1982, S.131 / Der Brockhaus, Atlas zur Geschichte, FA. Brockhaus, Mannheim · Leipzig, 2007, S.108-111.
- (13) Die Götterlieder der Älteren Edda. Auswahl (Reclam), Einleitung, S.3-4.
- (14) 註(9)
- (15) 註(13) a. a. O., S.5-7.
- (16) a. a. O., S.6.
- (17) 註(4) a. a. O., S.3.
- (18) KHM/Reclam, KHM/BDK, DS/BDK, DS/Uther, J. Grimm/DM.
- (19) Die Heldenlieder der Älteren Edda (Reclam), S.7-20, 邦訳『エッタ―古代北歐歌謡集』(谷口幸男訳) 九三―九八頁。
- (20) a. a. O., S.7.
- (21) a. a. O., S.7-8.
- (22) 註(4) a. a. O., S.3.
- (23) 『昔語・伝説小事典』野村純一／他篇、みずうみ書房、昭和六二年。
- (24) 千宝『搜神記』竹田晃訳、平凡社ライブラリー、二〇〇〇年、四二六―四二七頁。
- (25) EM, Bd.12, S.311-318. (Schwanjungfrau)
- (26) Altnordisches Glossar: Wörterbuch Zu Einer Auswahl Alt-isländischer Und Alt-norwegischer Prosatexte, Theodor Möbius, USA, 2010 (Reprints), p.489-490.
- (27) J. Grimm/DM, Bd.1, S.354.
- (28) EM, Bd.12, S.314.
- (29) ミルチア・エリブーナ『シヤーマニズム』上・下、堀一郎訳、ヤクモ書芸文庫、二〇〇四年。
- (30) 前掲書、上、二七〇―二七二頁、同下、一四八―一四九頁。
- (31) Die Götterlieder der Älteren Edda, a. a. O., S.61.
- (32) 註(29) 下、一四八―一四九頁。
- (33) Die Götterlieder der Älteren Edda (Auswahl), Einleitung, S.3-7.
- (34) 『グリーム兄弟メルヘン論集』高木昌史・高木万里子訳、法政大学出版局、二〇〇八年、二九―三九頁。
- (35) KHM/BDK, S.220-225.
- (36) a. a. O., S.944.
- (37) Die Heldenlieder der Älteren Edda, S.9.

- (38) Hda, Bd.7, S.1402-1406. (Schwan)
- (39) KHM/BDK, S.45-53.
- (40) KHM/BDK, S.457-460.
- (41) KHM/BDK, S.879.
- (42) a. a. O., S.1050.
- (43) Die Heldenlieder der Älteren Edda, S.102-114. 邦訳『エッタ』一三八—一四三頁。
- (44) a. a. O., S.111-112.
- (45) 邦訳『エッタ』一四一頁。
- (46) 『世界シンボル事典』ハンス・ピーターマン著、藤代幸一監訳、八坂書房、二〇〇〇年、七四—七六頁。(大方ラス)
- (47) Hda, Bd.7, S.427-457. (Rabe)
- (48) 註(46)
- (49) Die Götterlieder der Älteren Edda, S.91. (Das Grimnir-lied)
- (50) 註(26) p.206, 307.
- (51) J. Grimm/DM, Bd.2, S.559.
- (52) a. a. O., S.539.
- (53) a. a. O., S.560.
- (54) 『柳田國男全集』25、ちくま文庫、一九九〇年、一一四—一一九頁。
- (55) KHM/Reclam, Bd.1, S.186-188.
- (56) KHM/Reclam, Bd.3, S.63-64.
- (57) 『柳田國男全集』∞、ちくま文庫、一九九〇年、「昔話や文学」四三〇—四四〇頁。
- (58) 『柳田國男とヨーロッパ口承文芸の東西』高木昌史編、三交社、二〇〇六年、第二部a「昔話」1聴耳。
- (59) Die Heldenlieder der Älteren Edda, S.102-114. (Das Fatnirlied) 邦訳『エッタ』一三八—一四三頁。
- (60) Das Nibelungenlied, Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch, Nach dem Text von Karl Bartsch und Helmut de Boor ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von Siegfried Grosse, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2002 (1997), S.36-37.
- (61) 『ニーベルンゲンの歌』前編、相良守峯訳、二〇〇四(一九五五)年、三四頁。
- (62) Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch von Matthias Lexer, 3. Aufl., Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft, Stuttgart, 1989, S.148.
- (63) 註(46) 四七七一—四七九頁。
- (64) J. Grimm/DM, Bd.2, S.573.
- (65) DS/BDK, S.257-260. 註(26) p.331-332.
- (66) J. Grimm/DM, Bd.2, S.574.
- (67) EM, Bd.2, S. 118-134. 『ヒューオウルフ』忍足欣四郎訳、岩波文庫、一九九〇年。

- (67) 前掲書『ペーオナルフ』二〇六頁以下。
- (68) EM, Bd.12, S.673-679. (Sigurd, Siegfried)
- (69) Historie von dem gelährten Siegfried, in: Deutsche Volksbücher in drei Bänden, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar, 1982 (Bd.1). 『不死身のシークフリート』 桜井春隆訳 (『ドイツ民衆本の世界』 2、国書刊行会、一九八七年、所収)。
- (70) 「アンドロメダを救い出すヘルセウス」(ボンハイ壁画)、『ウテヴァール』ヘルセウスとアンドロメダ」等。
- (71) アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、二〇〇九(一九五三)年、八一―八二頁／オウィディウス『転身物語』田中秀央・前田敬作訳、人文書院、昭和四六(四一)年、一四六―一五〇頁。
- (72) Jacobus de Voragine, *Legenda aurea*. Lateinisch/Deutsch. Ausgewählt, übersetzt und herausgegeben von Rainer Nickel, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2005 (1988), S.197. ヤロプス・デ・ウオラギネ『黄金伝説』第二巻、前田敬作・山口裕訳、人文書院、一九八四年。
- (73) 註(72) *Legenda aurea*, S.192-197. (De sancto Georgio) / 前掲『黄金伝説』七六―八〇頁(聖ゲオルギウス)。
- (74) KHM/BDK, S.275-295.
- (75) a. a. O., S.967.
- (76) *Gestalten des Mittelalters*, S.417.
- (77) Die Heldenlieder der Älteren Edda, S.115-126 (Das Sigdrifalied) / S.158-161 (Brynhills Helahrd). 邦訳『エッタ』一四三―一四八、一六二―一六三頁。
- (78) Über die Entstehung der altdutschen Poesie und ihr Verhältnis zu der nordischen (W. Grimm/KS, Bd.1). ヴァイルヘルム・クリム「古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係について」谷口幸男訳 (『ドイツ・ロマン派全集』第十五巻「グリム兄弟」、国書刊行会、一九八九年所収)。
- (79) 前掲邦訳、三〇六頁
- (80) Friedrich Schlegel, Über die Sprache und Weisheit der Indier, in: Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe, Hrg. von Ernst Behler, Verlag Ferdinand Schöningh, Paderborn/München/Wien/Zürich. Erste Abteilung. Bd.8, 1975.
- (81) 『言語学の誕生』風間喜代三著、岩波新書、一九八一(七八)年
- (82) Max Lüthi, Märchen, 8.Aufl., J. B. Metzlersche Verlagsbuchhandlung, Stuttgart, 1990, S.67-69. 『メルヘンの誘い』マックス・リュートイ著／高木昌史訳、法政大学出版局、二〇一〇(一九九七)年、一〇一―一二二頁。
- (83) J.Grimm/KS, Bd.4, S.119. Ludwig Denecke, Jacob Grimm und sein Bruder Wilhelm, J. B. Metzlersche Ver-

- lagsbuchhandlung, Stuttgart, 1971, S.56–57.
- (87) Die Bibliothek der Brüder Grimm, S.311–313.
- (88) 註 (2)
- (89) Herder/Goethe/Frisi/Möser, Von deutscher Art und Kunst. Einige fliegende Blätter. Hrsg. von Hans Dietrich Irmscher, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1977.
- (89) I. Auszug aus einem Briefwechsel über Oßian und die Lieder alter Völker:
 a. a. O., S.26.
 a. a. O., S.27–31.
- (90) Johann Gottfried Herder, Stimmen der Völker in Liedern <Volkslieder: Zwei Teile 1778/79, Hrsg. von Heinz Rölleke, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1975.
- (91) a. a. O., S.296–304, S.308–311.
- (92) Johann Wolfgang von Goethe, Sämtliche Werke, Briefe, Tagebücher und Gespräche, hrsg. von Dieter Borchmeyer u. a. 40Bde, Frankfurt a. M. 1985ff., Bd.12, S.342–343.
 『ゲーテの読書世界文学』高木昌史編訳、青土社、二〇〇六年、八九–九四頁。
- (93) 例えに、連作詩「根源の言葉、オルフォイノス風」[「Orphisch (一八一七年) 等。註 (2) Bd.2, S.501–502.
- (94) Richard Wagner, Der Ring des Nibelungen. 1.Das Rheingold, 2.Die Walküre, 3.Siegfried, 4. Götterdämmerung.
- (95) (Reclam)
 (95) Das Rheingold, S.105–106, Götterdämmerung, S.124.
 (96) Das Rheingold, S.106.
 生歌参集文鑑
- * Die Götterlieder der Älteren Edda. Übersetzt, kommentiert und herausgegeben von Arnulf Krause, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2006.
- * Die Heldenlieder der Älteren Edda. Übersetzt, kommentiert und herausgegeben von Arnulf Krause, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2010 (2001).
- * Die Edda des Snorri Sturluson, Ausgewählt, übersetzt und kommentiert von Arnulf Krause, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2010 (1997).
- * Götterlieder der Älteren Edda. Auswahl. Nach der Übersetzung von Karl Simrock, neu bearbeitet und eingeleitet von Hans Kühn, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1991.
 (Auswahl)
- * Heldenlieder der Älteren Edda. Auswahl. Übertragen, eingeleitet und erläutert von Felix Grenzner, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 1993. (Auswahl)
- * Gundula Jäger, Die Bildsprache der Edda. Vergangenheits-

- und Zukunftsgeheimnisse in der nordisch-germanischen Mythologie, 2. Aufl., Verlag Urachhaus, Stuttgart, 2010 (2004).
- * Jacob Grimm Deutsche Altertumskunde, bearbeitet und herausgegeben von Else Ebel, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1974.
- * Medieval Folklore. A Guide to Myths, Legends, Tales, Beliefs, and Customs. Edited by Carl Lindahl, John McNamara, John Lindow, Oxford University Press, 2002.
- * Simsek/Palsson, Lexikon der altnordischen Literatur, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1987.
- * Rudolf Simsek, Lexikon der germanischen Mythologie, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1984.
- * Gestalten des Mittelalters. Ein Lexikon historischer und literarischer Personen, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 2007.
- * Reclams Lexikon der germanischen Mythologie und Heldensage, Arnulf Krause, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2010.
- * 『エッダ―古代北欧歌謡集』谷口幸男訳、新潮社、昭和四八年
- * 『アイスランド・サガ』谷口幸男訳、新潮社、一九八六(七九)年
- * 『北方民族文化誌』上・下、オラウス・マグヌス著、谷口幸男訳、溪水社、一九九一/九二年
- * 『デンマーク人の事績』サクソ・グラマティクス著、谷口幸男訳、東海大学出版会、一九九三年
- * 『エッダとサガ』谷口幸男著、新潮選書、一九七六年
- * 『北欧神話の世界』アクセル・オルリック著、尾崎和彦訳、青土社、二〇〇三年
- * 『ゲルマン人の神々』ジヨルジュ・デュメジル著、松村一男訳、国文社、一九九三年
- * 『北欧神話』H・R・エリス・テイヴィッドソン著、米原まり子・一井和子訳、青土社、二〇〇二(一九九二)年

図版

- * [増補]最新図説世界史、浜島書店、一九九四年 [1]
- * Gundula Jäger: Die Bildsprache der Edda, Verlag Urachhaus, Stuttgart, 2010 [2 / 3 / 4 / 5]